

モデル事業名	廃校・空き家と耕作放棄地を活用した田舎体験プロジェクトによる都市農村交流と人口定住
活動団体名	貴和の里にっどう会
ホームページ	作成中
所属/担当者名	事務局 岡本 雅
連絡先	Tel 083-287-1096 E-mail qqfw3u59@dolphin.ocn.ne.jp
活動地域	山口県下関市菊川町豊東東部 縦の木・道市・響井集落

● 活動地域の概要

- ・縦の木・道市・響井集落は、下関市菊川町の山間谷間に位置する。
- ・道路整備により下関市中心市街地まで車で約25km、美祢西IC、小月ICまで車で15分程度と都市生活者にとっては比較的近距离にある自然豊かな美しい田舎である。
- ・人口145人、55世帯の小規模集落である。
- ・集落の高齢化率は47.5%と高く、人口減少・高齢化が進み、空き民家や担い手不足による耕作放棄地が目立っている。
- ・平成19年3月に地区内唯一の豊東小学校響井分校が廃校となり、コミュニティの活力低下が大きな問題となっている。



【山口県内位置図】



【集落周辺図】



【ボランティアで再生した空き民家の外観】



【廃校になった響井小学校分校】



【棚田】

● 活動地域の課題

H20年度事業により、以下の4つの課題が明らかになった。

- 1) 夏休みを中心に地域塾を実施したが、夏休み以外にも定期的に都市住民が集落を訪れる仕組み作りを進めていかなければならない。また廃校を拠点に地域塾を実施したが、屋外空間(運動場)については積極的に利用されているが、屋内空間(教室)についてはまだ利用頻度が低く、屋内を利用するための整備が必要である。
- 2) 地域塾は日帰りであったため、都市住民に地域のことをより深く知ってもらうためには、滞在時間を延長するようなプログラムが必要である。そのためには滞在施設が必要であるが、空き民家1軒の実測調査及びボランティアによる補修を実施したが、宿泊利用に向けては台所・浴室の設備改修が必要である。
- 3) 空き民家は他にも4~5軒確認されており、それらの実測調査及び貸出に向けての検討が必要である。
- 4) 耕作放棄地のマップを作成したが、広範囲にまたがりこれの再生にどう手をつけたらいいのか大きな課題となる。

● 活動の内容

・平成20年度

地域塾の開講と参加者のアンケート収集と意向調査

廃校・空き家及び耕作放棄地の実態と所有者の貸し出し意向の聞き取り調査

空き家・耕作放棄地の活用方法・棚田オーナー制度検討と使用可能な整備及び報告書作成

・平成21年度

「地域塾」を定期的に開講し、都市と農村の交流を図り、アンケートを通じて都市住民のニーズを把握する。

再生した民家で田舎宿泊体験を実施する

ホームページに「空き家バンク」を立ち上げるための準備を行う。

耕作放棄地を実験的に整備し、棚田オーナー制等へ向けての検討を行う。

上記を踏まえ、空き家の活用や耕作放棄地を再生する棚田オーナー制度等について検討を行う。

● 活動の成果

・平成20年度

地域塾を4回開講し、229人の参加があった。参加者のアンケートと意向調査をし、次の活動の参考にした。

地域塾のパネルを作り展示し、会活動PR用のパンフレットを作成し、各所に配布した。

廃校と空き家の実態を調査し、廃校は市から借受け、空き家も所有者の了解を得て無償で借りることが出来た。

耕作放棄地の実態調査を行い、貸出意向調査を実施した。その結果、耕作可能・不可能等が判明した。レベルに合わせた整備・活用方法を検討する必要がある。46アールを草刈と耕転し翌春の作付けを可能にした。

借りた空き家を会員の手で傾きの修正、床下の補修・補強をし、広い板間づくり、囲炉裏・かまどを再現した。但し、民宿としての利用にはハード事業による改修が必要になる。



竹でそうめんのすべりだい



耕作放棄地草刈作業

・平成21年度

夏休み子ども塾6回で356名、地域大人塾24名、稲刈り・芋ほり・餅つき187名

総勢567名の参加があり、市内各地からと地元会員も参加が増え一緒に楽しむ雰囲気が出来てきた。

改修した民家の田舎体験は、設備が不十分で一般の利用には及ばなかったが、市立大学生がゼミで一泊した他、地域塾でカレー作りや芋ほりの昼食会場として利用した。今年度3戸の空き家を実態調査する計画になっているが、現在2戸目に入っている。ホームページの立ち上げをすすめてある。

昨年再生した耕作放棄地にヒマワリ・コスモス・蕎麦を播種して景観を一変させることが出来た。

蕎麦は、実を収穫することが出来た。

耕作放棄地を新たに35アール草刈を実施した。



かまどご飯でカレー作



里山ウオーク&滝あそび

● 今後の課題及び展望

・課題

地域塾も3年目を迎え一応の定着をしたが、多彩にあるメニューの選択、開講回数、参集定員、参集呼びかけ範囲等、又開講を手伝うスタッフの確保は如何にするか。

宿泊体験の出来る民家は出来たが、改修がまだ途中で法のクリアが出来ない。ハード事業等の検討が必要。

空き家バンクの立ち上げまではこぎつけたが今後どのように進めるか研究の余地がある。

棚田オーナー制度を地元からの指導者の養成、農機具等の貸出等どうするか検討が必要。

地域外からのボランティアの活用。

活発な活動を進める上での資金確保をどのように進めるか。

以上のように身近に自分たちで出来ることと、地域外に求めなければならないことと課題は多い。

・展望

地域内の理解もだんだんと得られ、8割以上の入会があり、地域外を含めて80会員を超えた。

大学との連携も山口大学工学部に加えて下関市立大学とも協定を結び、活動の協力が得られるようになった。

両大学の学生が、地域の実態を卒論に取り上げ、更に緊密な連携が生じてきた。

山口県の県民活動パワーアップ賞受賞を受けて、市内各界各層から注目されるようになり、行政サイドからも何かと声がかかるようになった。

地道な活動が続ける中で地域内外から次のリーダーやスタッフを養成することに努めれば成果は上がってくるものと考えられる。